

娘からみた母親と世間の恋愛観

娘からみた母親と世間の恋愛観

青野篤子

(福山大学人間文化学部心理学科)

大学生は将来の仕事や結婚について考える時期を過ごしている。とくに女性にとっては、仕事と家庭の両立が大きな問題であり、娘世代の意識形成には、世の中の男女平等の進展や、女性のモデルとしての母親、社会通念が影響を与えると考えられる。本研究は、恋愛に焦点を当て、大学生が認知している、自分自身、同性の親、世間一般の恋愛観を調査し、それらを比較検討するために行なわれた。女性大学生 124 名、男性大学生 335 名に、和田(1994)の恋愛観尺度に対する 3 通りの回答を求めた。因子分析の結果、恋愛至上主義因子と恋愛幸福因子の 2 因子が抽出された。恋愛至上主義因子においては、男女ともに、世間の得点が自分や同性の親のそれを上回っていた。恋愛幸福因子においては、男性では自分の得点が他より高かったのに対して、女性では自分と世間が類似していた。娘世代は母親世代より恋愛に肯定的な態度をもっているが、これが男女平等主義的態度とどのように関係するかは今後の検討課題である。

【キーワード：恋愛観，娘，母親】

問 題

第二波フェミニズム以降、男女平等に関する法整備は徐々に進んできた。1985年に男女雇用機会均等法が制定され、女性差別撤廃条約に批准、1995年にILO条約批准、1999年の男女雇用機会均等法改正を経て、同年男女共同参画社会基本法が制定された。それから10年以上経過したが、いまだに日本女性の社会的地位は向上したとは言えない。2013年10月に発表されたジェンダー・ギャップ指数によると、日本のランキングは前年の101位から105位まで後退した。この指数は、経済・教育・健康・政治の分野におけるさまざまな指標を総合したものであり、日本の順位の低さは、とくに男女の働き方の違いによる経済力の格差と、国会議員や管理職など政策決定分野での女性比率の低さによる。日本では、めざましい速度で晩婚化と非婚化が進んでいる。しかし、これは必ずしも、女性の自立を意味しない。若者の就職難と非正規雇用による経済的問題、男女の結婚への期待のずれなどが原因と考えられる(青野, 2008; 小倉, 2010)。日本のような労働環境のもとでは、ワークライフバランスや仕事と家庭の両立が難しいため、結果として、男女ともに「男は仕事、女は家庭」という性別分業を選ばざるを得ないのではないだろうか。2013年の男女共同参画白書(内閣府, 2013)によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に、「賛成」と「ど

青野篤子

「どちらかという賛成」の合計が、「反対」と「どちらかという反対」の合計を上回った。若い女性の家庭回帰や性別分業志向も見てとれる。

男女共同参画社会基本法でも男女共同参画は今世紀の「最重要課題」とであるとされているように、男女平等は社会全体の課題であると言えるが、同時に親世代から次の世代に向けて男女平等の考え方や実践が継承されているかという問題でもある。男女平等意識の継承には、3つの相があると考えられる。まず、男女平等思想自体が時代によって少しずつ変化していることがあげられる。1960年代から70年代にかけては第二波フェミニズム(ウィメンズ・リブ)が押し寄せ、女性の意識覚醒と女性の連帯が叫ばれた。1980年代になるとフェミニズムは急進性が薄れ、やわらかなフェミニズムとも呼ばれる時代に入る。1990年代にはフェミニズムに対する揺り戻し(バックラッシュ)が起こり、「ジェンダー・フリー」や男女平等の取り組みを阻止しようという動きが露わとなった。2000年代はポストフェミニズムの時代と言えるが、新自由主義との相克(村本, 203), 女性間の分断(窪田, 2013)という試練を迎えていると言えよう。第二の相は、これらの時代を生きた女性たち(フェミニスト世代)の意識のレベルである。第一世代(60代)は意識覚醒(consciousness raising)と女性の連帯を特徴とするウィメンズ・リブ(女性解放運動)に関わった人が多く、第二世代(40・50代)は運動より主義・主張に傾倒しフェミニズム思想を相対化・洗練させた世代だと言える。そして第三世代(30代)は自らの感性や経験を重視することからリブに共感的な面があると澁谷(2008)は指摘する。

第三の相は、個々の女性(母親と娘)の継承のレベルである。若いころに男女平等意識をもっていた女性であっても、仕事、結婚、子育て等を経験するうちに、男女平等意識は変化していくかもしれない。また、公的領域と私的領域での意識・行動のずれがあると考えられる。たとえば、職場では男女平等を唱えながら、家庭では性別分業を実践するなど。青野(2012)は、Yahoo!知恵袋から母親世代と娘世代が投稿した質問と回答に注目し、男女平等意識の差異を分析した。図1に示すように、母親世代は男女平等の理念に賛意を示しつつも、自分の娘には伝統的な女性の生き方を望む傾向がある。娘世代は母親の伝統的な考え方に不満や反感を抱くケースが多く見られた。興味深いのは、インターネットという「世間」は中庸の徳をもって、両者にアドバイスを行っていることである。すなわち、「世間」が両者の間をとりもつような役割を果たしていると考えられる(図1)。

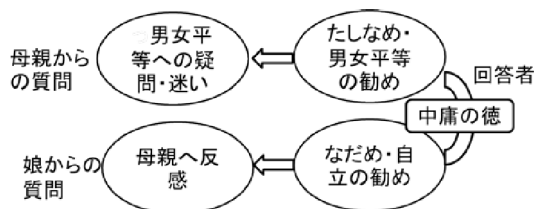


図1 Yahoo!知恵袋にみられる母親と娘世代からの質問とそれへの回答

娘からみた母親と世間の恋愛観

母娘の社会参加意識について調査を行なった青野・塩崎・金子(1993)は、娘は母親の期待を受け止め、母親世代よりも一歩進んだ社会参加意識を有することを見出した。出沼・金崎(2007)によれば、大学生のおよそ半数が、女性が子育てに専念することを望んでいるが、幼少期に母親が常勤で働いていた場合には母親の生き方に肯定的な傾向が見られた。一方、男の子をもつ母親は女の子をもつ母親よりも性別化の期待が強く、ジェンダーによるねじれの関係が見られた(内田・田中・荻原・菊池・増田・富山, 2006)。野村(1992)は、いくら有職の母親の娘であっても、娘たちには生活に対する現実認識や人生に対する長期的視点が薄く安定志向であることを指摘している。そして、母親たちが経験を率直に語ることが少ないことに問題があるとしている。このように、現代の母親世代はフェミニズムに賛同しつつも、理想と現実、公と私、本音と建前とのギャップがあることが推測される。図2に示すように、母親から娘への影響が公的領域と私的領域で同じでない。同時に、娘は母親からだけでなく一般社会(世間)からも影響を受ける。

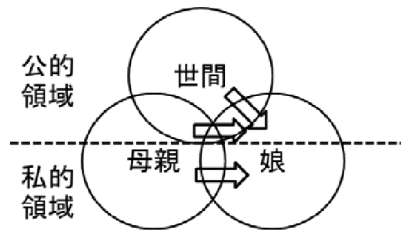


図2 男女平等意識の継承モデル

男女平等社会の実現には、これまで仕事と家庭の両立が主要な問題とされてきたが、現在女性のライフコースは多様化し、国立社会保障・人口問題研究所の第14回出生動向基本調査では、非婚就業コース、DINKSコース、両立コース、再就職コース、専業主婦コースに分類されている(内閣府, 2013)。さらに、結婚するかしないかという選択肢も存在する。つい最近まで日本は「皆婚社会」とよばれるほど結婚が当たり前であり、結婚して一人前という見方も強かった(村木, 2006)。また、伊田(1998)が指摘するように、一家の大黒柱として家計を支える男性と、家庭を守り補助的労働に従事する女性が単位となったカップル単位社会では、結婚する方が有利な点もあった。結婚制度を維持するために、結婚に至る過程としての「恋愛はすばらしい」という恋愛・結婚イデオロギーが利用された。現在、生涯未婚率は男性が約2割、女性が約1割と言われており、恋愛を経験しない人も増加しているが、そうだからと言って恋愛が軽視されているわけではなからう。小倉(2010)によると、彼らには結婚願望はあるにはあるが、理想が高すぎたり、お互いの希望が合致しないために結婚ができないのである。

家庭での親子の会話においても、結婚や恋愛が話題になることもあるが、結婚を前提とし

青野篤子

た恋愛を唱える親に対して、恋愛重視の子ども世代はギャップを感じることも多い。宮下・村上(1996)は、大学生の恋愛観を調査した。その結果、男子においては母親に対する愛着関係が将来の恋愛に影響を及ぼす可能性があるのに対して、父親はほとんど影響がないとした。一方女子においては、同性の親も異性の親も恋愛に影響はなく、恋愛を学ぶ場は外の社会へと向けられているとしている。子どもは家庭内で恋愛を知るのではなく、第三者の存在として、学校やアルバイト先といった世間の意見や、インターネットを介して考えを得ている可能性がある。

以上のことから、現代青年の恋愛観は親世代と大きく異なり、かつ、社会からの影響を受けていると考えられる。そこで、本研究では、大学生を対象に、「大学生自身(自分自身)の恋愛観」と、「大学生からみた同性の親の恋愛観」、さらに「大学生からみた世間一般の恋愛観」の3つを調査する。仮説としては、自分自身の恋愛観は、同性の親の恋愛観よりも世間一般の恋愛観とより類似していると想定する。

その際に、和田(1994)の恋愛に対する態度尺度を使用する。これは、他者に対する恋愛感情を測るものではなく、人が恋愛をどのようにとらえているかを測るものであり、恋愛至上主義(恋愛をロマンティックなものとしてとらえる側面)、結婚への恋愛(結婚を意識させる側面)、恋愛のパワー(恋愛はどんな障害にも打ち勝てるという信念)、理想の恋愛(理想の恋愛に対する側面)の4つの下位尺度から構成される。それぞれ4つの下位尺度においては、大学生を対象とした調査により、信頼性と妥当性が認められている。

方法

参加者 H県東部の私立大学の学生、女性124名、男性335名、計460名(年齢: $M=19.6$, $SD=1.2$)。学部の内訳は、経済学部111名、生命工学部65名、工学部126名、人間文化学部156名、薬学部1名、不明1名であった。

調査期間 2012年9月から10月にかけて質問紙調査を実施した。

質問紙の構成 (1)性別、年齢、学年、所属(学部・学科)。(2)和田(1994)の恋愛に対する態度尺度の下位尺度である恋愛至上主義・結婚への恋愛・恋愛のパワー・理想の恋愛から3項目ずつ抽出した12項目。これを恋愛観尺度とし、自身の恋愛観(自身が恋愛についてどう考えているか)、同性の親の恋愛観(同性の親はどう考えていると思うか)、世間の恋愛観(世間の人はどう考えていると思うか)の3つの対象別に、それぞれの項目に対して1(そう思わない)～5(そう思う)の5段階で回答を求めた。

手続き 授業担当者に依頼し、授業開始直後または授業終了直前の15分～20分程度で行った。参加者に対して、質問紙調査の実施の趣旨、回答方法、個人情報の保護について教示してから、回答をしてもらった。調査は無記名で行った。

娘からみた母親と世間の恋愛観

結果

記述統計量 恋愛に対する態度尺度の全項目に対する、大学生が認知した、自分自身、同性の親、世間一般(対象別)の評定値の平均と標準偏差を表1に示している。

表1 3つの対象別・性別の記述統計量(平均とSD)

	自分自身の恋愛観			同性の親の恋愛観			世間一般の恋愛観		
	全体	男性	女性	全体	男性	女性	全体	男性	女性
うまくいっている恋愛関係は、興奮させるものではなく、安心できるものである。	4.07(0.93)	4.06(0.97)	4.09(0.82)	3.70(1.06)	3.68(1.04)	3.76(1.13)	3.80(0.98)	3.75(1.00)	3.94(0.91)
強力な愛はすべての困難や障害を乗り越える。	2.85(1.20)	2.82(1.21)	2.93(1.16)	2.77(1.14)	2.84(1.09)	2.60(1.24)	3.53(1.03)	3.50(1.02)	3.62(1.05)
恋愛はあらゆる関係の中でもっとも重要なものである。	2.88(1.17)	2.93(1.16)	2.75(1.18)	2.62(1.06)	2.72(1.02)	2.34(1.12)	3.39(1.01)	3.40(1.02)	3.37(1.02)
良い結婚をする際には、相手の仲間関係が良いかどうか、恋愛関係よりも重要である。	3.09(1.00)	3.13(1.01)	2.95(0.94)	2.87(1.07)	2.85(1.07)	2.93(1.07)	2.70(1.00)	2.68(1.02)	2.77(0.93)
もし二人のあいだの愛が死んで意味のないものになるのならば、あらゆるものがダメになる。	2.67(1.18)	2.69(1.14)	2.64(1.29)	2.59(1.13)	2.65(1.10)	2.44(1.19)	3.26(1.11)	3.25(1.08)	3.28(1.19)
恋愛は物事をうまくするための励みになる。	3.53(1.05)	3.57(1.04)	3.41(1.07)	3.11(1.02)	3.17(1.00)	2.94(1.04)	3.80(0.89)	3.78(0.90)	3.85(0.87)
愛情は暖かく親密で、深くかかわっている感じを抱かせるけれど、必ずしも性的に興奮を感じさせるものではない。	3.65(1.03)	3.60(1.05)	3.77(0.97)	3.42(1.04)	3.38(1.02)	3.51(1.10)	3.33(1.03)	3.29(1.04)	3.45(1.02)
真の恋愛状態というのは、永遠の愛である。	2.97(1.20)	3.00(1.20)	2.90(1.20)	2.87(1.19)	2.93(1.03)	2.70(1.23)	3.42(1.04)	3.42(1.04)	3.44(1.05)
共通の関心があるかどうかは、実際に重要ではない。本当の恋愛感情があるかぎり、適応できるだろう。	3.23(1.01)	3.30(1.00)	3.06(1.03)	3.17(1.04)	3.24(1.00)	2.99(1.12)	3.41(0.95)	3.44(0.93)	3.33(1.01)
人は社会的地位にかかわらず、愛する人と結婚すべきである。	3.85(1.05)	3.95(1.01)	3.58(1.12)	3.45(1.13)	3.51(1.07)	3.28(1.28)	3.72(1.04)	3.71(1.02)	3.74(1.09)
真の愛では幸福感は必ず生じる。	3.75(1.03)	3.76(1.06)	3.73(0.96)	3.42(1.03)	3.40(1.02)	3.50(1.07)	3.83(0.96)	3.77(0.96)	3.98(0.93)
恋愛状態になると、愛する人が人生の唯一の目的となる。	2.99(1.14)	3.07(1.12)	2.77(1.17)	2.75(1.10)	2.82(1.06)	2.55(1.20)	3.41(0.99)	3.41(0.96)	3.41(1.07)

注:1~5の値を取り得る。

恋愛観尺度の因子分析 自身の恋愛観、同性の親の恋愛観、世間の恋愛観について別々に主因子法・Varimax回転による因子分析を行った。その結果いずれも恋愛至上主義因子と、恋愛幸福因子が抽出された。恋愛至上主義因子に共通していたのは、「強力な愛はすべての困難や障害を乗り越える」、「恋愛はあらゆる関係の中でもっとも重要なものである」、「もし二人のあいだの愛が死んで意味のないものになるのならば、あらゆるものがダメになる」、「恋愛状態になると、愛する人が人生の唯一の目的となる」の4項目であった。これらの平均値を恋愛至上主義得点とした。また、恋愛幸福因子に共通していたのは、「うまくいっている恋愛関係は、興奮させるものではなく、安心できるものである」、「人は社会的地位にかかわらず、愛する人と結婚すべきである」、「真の愛では幸福感は必ず生じる」の3項目であった。これらの平均値を恋愛幸福得点とした(表2)。

青野 篤子

	自分自身		同性の親		世間一般	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
	平均(SD)	平均(SD)	平均(SD)	平均(SD)	平均(SD)	平均(SD)
<恋愛至上主義>						
強力な恋愛はすべての困難や障害を乗り切る。	2.82(1.21)	2.93(1.16)	2.84(1.09)	2.60(1.24)	3.50(1.02)	3.62(1.05)
恋愛はあらゆる関係の中でもっとも重要なものである。	2.93(1.16)	2.75(1.18)	2.72(1.02)	2.34(1.12)	3.40(1.02)	3.37(1.02)
もし二人のあいたの愛が死んで	2.69(1.14)	2.64(1.29)	2.65(1.10)	2.44(1.19)	3.25(1.08)	3.28(1.19)
意味のないものになるのならば、あらゆるものがダメになる。	3.07(1.12)	2.77(1.17)	2.82(1.06)	2.55(1.20)	3.41(0.96)	3.41(1.07)
恋愛状態になると、愛する人が人生の唯一の目的となる。	2.86(0.85)	2.75(0.86)	2.76(0.76)	2.48(0.96)	3.37(0.77)	3.42(0.88)
平均						
<恋愛幸福>						
うまくいっている恋愛関係は、	4.06(0.97)	4.09(0.82)	3.68(1.04)	3.76(1.13)	3.75(1.00)	3.94(0.91)
興奮させるものではなく、安心できるものである。	3.95(1.01)	3.58(1.12)	3.51(1.07)	3.28(1.28)	3.71(1.02)	3.74(1.09)
人は社会的地位にかかわらず、愛する人と結婚すべきである。	3.76(1.06)	3.73(0.96)	3.40(1.02)	3.50(1.07)	3.77(0.96)	3.98(0.93)
真の愛では幸福は必ず生じる。	3.90(0.74)	3.81(0.70)	3.53(0.87)	3.52(0.87)	3.73(0.77)	3.90(0.77)
平均						

恋愛至上主義得点の分散分析の結果 対象間にどのような差があるかどうかを、性別×対象の分散分析により検討した。その結果、性別と対象の交互作用が1%水準で有意であった($F(2,836)=5.07, p<.01$)。すなわち、自分自身の恋愛観、同性の親の恋愛観、世間一般の恋愛観、という3つの評定対象間の差の現れ方が男女で異なることがわかった。単純主効果の検定を行った結果、男性における対象は1%水準で有意であった($F(2,836)=65.24, p<.01$)。多重比較の結果、同性の親($M=2.76$)と自分自身($M=2.86$)の間に有意差はなかったが($F(1,418)=12.50, n.s.$)、世間一般($M=3.37$)と自分自身($M=2.86$)の間($F(1,418)=68.78, p<.001$)、世間一般($M=3.37$)と同性の親($M=2.76$)の間($F(1,418)=102.66, p<.001$)に、それぞれ0.1%水準で有意差があった。女性における対象は、1%水準で有意であった($F(2,836)=56.46, p<.01$)。多重比較の結果、同性の親($M=2.48$)と自分自身($M=2.75$)の間に0.1%水準で($F(1,418)=12.50, p<.001$)、世間一般($M=3.42$)と自分自身($M=2.75$)の間に0.1%水準で($F(1,418)=44.68, p<.001$)、世間一般($M=3.42$)と同性の親($M=2.48$)の間に0.1%水準で($F(1,418)=68.78, p<.001$)有意差があった。このことから、男性では自分自身と同性の親との差がないのに対して、女性ではすべての間に差があると言える。自身・同性の親・世間の恋愛至上主義得点の平均値を男女別に図3に示している。

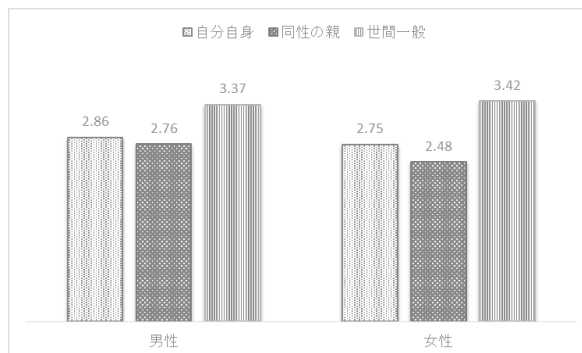


図3 性別・対象別の恋愛至上主義得点

娘からみた母親と世間の恋愛観

恋愛幸福得点の分散分析結果 対象間にどのような差があるかどうかを、性別×対象の分散分析により検討した。その結果、性別と対象の交互作用が5%水準で有意であった($F(2,836)=3.84, p<.05$)。すなわち、男女で、自分自身の恋愛観、同性の親の恋愛観、世間一般の恋愛観の差の現れ方が異なることがわかった。交互作用が有意であったため、単純主効果検定を行った。その結果、男性における対象が0.1%水準で有意であった($F(2,836)=28.00, p<.01$)。多重比較の結果、同性の親($M=3.53$)と自分自身($M=3.90$)の間に1%水準($F(1,418)=65.32, p<.01$)、世間一般($M=3.37$)と自分自身($M=3.90$)の間に1%水準($F(1,418)=12.00, p<.01$)、世間一般($M=3.37$)と同性の親($M=3.53$)の間に0.1%水準($F(1,418)=14.06, p<.001$)でそれぞれ有意差があった。女性における対象の効果も0.1%水準で有意であった($F(2,836)=12.46, p<.01$)。多重比較の結果、同性の親($M=3.52$)と自分自身($M=3.81$)の間($F(1,418)=14.78, p<.001$)、世間一般($M=3.90$)と同性の親($M=3.52$)の間($F(1,418)=19.95, p<.001$)にそれぞれ0.1%水準で有意差があったが、世間一般($M=3.90$)と自分自身($M=3.81$)の間($F(1,418)=1.61, n.s.$)に有意差はなかった。このことから、男性ではすべての間に差があるのに対して、女性では自分自身と世間の差がないと言える。自身・同性の親・世間の恋愛至上主義得点の平均値を男女別に図4に示している。

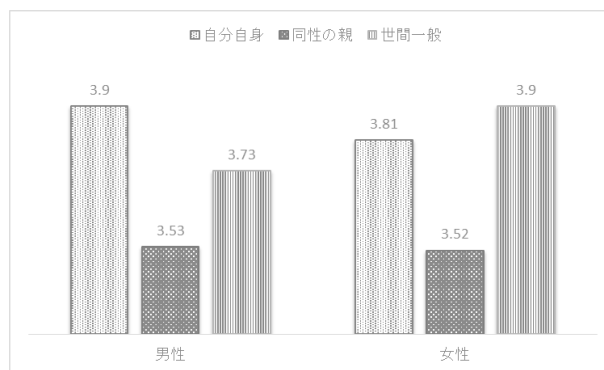


図4 性別・対象別の恋愛幸福得点

考 察

本研究で実施した質問紙調査は、大学生の恋愛観を問うものであった。そこで、大学生自身だけでなく、大学生の身近な存在としての同性の親、大学生をとりまく社会環境としての世間の恋愛観を同時に問うことで、親世代と大学生世代の恋愛観の差異から、その影響過程や継承性を検討とすることができる考えた。

青野篤子

伊田(1998)は、人によって異なるものの、若い世代も含めて多数派によつての「恋愛の常識」というものは、①恋愛とはいいもの、して当然・本能、②恋愛とは自分にぴったりな「真のパートナー」と出会うこと、③愛と恋とは違う、愛は結婚につながり、すばらしいもの、④恋愛・愛情は理屈ではなく直観や相性であつて、理性的に説明できるものではない、といったところであろう、と述べている。本研究で使用した和田(1994)の尺度における「恋愛至上主義」、「恋愛のパワー」、「結婚への恋愛」、「理想の恋愛」は、この①～④はほぼ共通しており、いわば大学生であれ親であれ「世間一般」であれ、恋愛観は類似している可能性が示唆される。

本研究では恋愛観は大きく2因子に分かれる結果となつた。すなわち、研究に参加した大学生たちの恋愛観の構造というものは、恋愛は人生において特別に重要なものであるという恋愛至上主義因子と、恋愛は人を幸せにし安定させるという恋愛幸福因子から構成されていた。このことから、伊田(1998)や和田(1994)が記述した恋愛の特徴と比較すると、恋愛の目標が結婚にあるという点が欠落していると思われる。すなわち、恋愛が必然的に結婚に結び付くという見方は現代の大学生には希薄になっているのではないだろうか。

本研究では、大学生の恋愛観は、自分自身が親よりも世間に近いものとして認知されているのではないかと仮定されていたが、恋愛観の次元によつて異なる結果となつた。すなわち、恋愛至上主義においては、自身の恋愛観は世間よりも親に近いものであつた。大学生は、自分自身や同性の親よりも世間一般の方が恋愛を美化していると考えていた。言い換えれば、自分や親の恋愛観をやや冷めたものとしてとらえている。恋愛幸福の次元においては、同性の親がもっとも低く、自身の恋愛観は世間と近かつた。これは仮説を支持するものである。大学生は両親の過去から現在を想像し、両親が果たして恋愛に肯定的な感情を抱いているかどうか確信がもてないのではなかろうか。一方、男子大学生の自分自身の恋愛観得点がかつとも高いことは注目に値する。すなわち、男子大学生は女子大学生よりも恋愛が幸福を導くという考えに肯定的であり、恋愛に対する一種の幻想を抱いているようにも見受けられる。

本研究の結果をまとめると次のようなことが言える。すなわち、男女ともに、自身の恋愛観、世間の人々の恋愛観よりも親の恋愛観をやや冷めたものとしてとらえていた。また、女性の方が、親の恋愛観と世間の恋愛観を対比的にとらえ、ある側面では、自身の恋愛観を親よりも世間に近いものとしてとらえる傾向があつた。このことから、自分自身の恋愛観は同性の親の恋愛観よりも世間一般の恋愛観とより類似しているという仮説は、一部支持されたと見えよう。

さて、本研究の結果を男女平等主義の継承という点から考察してみたい。大学生世代は親世代より恋愛を肯定的にとらえているという事実は、はたして大学生世代が男女平等になっていることを示しているだろうか。恋愛が結婚と結びついた概念であるとするれば、将来における職業的自立の阻害要因となる可能性もある。しかし、恋愛が必ずしも結婚を前提として

娘からみた母親と世間の恋愛観

いない今日の状況では、恋愛志向は男女平等と相反するものではなくなるのではないだろうか。事実、大学生の恋愛観は恋愛＝結婚という因子が独立して現れることはなかった。大学生たちは、両親の結婚生活や家庭生活を垣間見ることにより、また、(両)親からの様々なメッセージを受け取ることで、両親の恋愛観をやや保守的なものにとらえており、自分たちはもっと自由だと考えている。他方、世間ほど恋愛を楽観視してもいけないと言いたいのではないだろうか。ただし、本研究の限界として、親の価値観を直接とらえていないために、親世代から大学生世代への恋愛観の継承について断定はできない。今後は、仕事・家庭・結婚などについての将来設計をより詳細に調査すること、両世代を参加者として得ることを通して男女平等意識の継承性に接近していきたい。

引用文献

- 青野篤子 (2008). 女性の就業問題 都筑 学(編)働くことの心理学 ミネルヴァ書房 pp.148-171.
- 青野篤子 (2012). 男女平等意識の世代間継承性——Yahoo!知恵袋の分析から—— 福山大学 人間文化学部紀要, 12, 29-42.
- 青野篤子・塩崎千枝子・金子省子 (1993). 母娘の相互関係と社会参加意識の継承 松山東 雲女子大学人文学部紀要, 1, 67-83.
- 出沼佳奈子・金崎芙美子 (2007). 授業実践にみるジェンダー意識と子育て 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 30, 265-270.
- 伊田広行 (1998). シングル単位の恋愛・家族論——ジェンダー・フリーな関係へ—— 世界思想社
- 窪田容子 (2013). 日本のフェミニズムの歴史——女をめぐる意識と社会の変遷—— 女性ライフサイクル研究, 23, 13-20.
- 宮下一博・村上真澄 (1996). 青年における恋愛観と親子関係, 千葉大学教育学部紀要(教育学篇), 44, 13-17.
- 村木太一 (2006). 質問紙の結果に基づく大学生の恋愛観と結婚観について——メディアと家族の影響——, 愛知新城大谷大学紀要, 6, 33-45.
- 村本邦子 (2013). フェミニズムはどこへ——女たちの財産を次世代に受け渡すために—— 女性ライフサイクル研究, 23, 5-12.
- 内閣府男女共同参画局 (2013). 男女共同参画白書平成 25 年版
< http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/index.html >
- 野村泰代 (1992). 母—娘間の世代的伝達の問題点について 福岡教育大学紀要, 41, 45-53.
- 小倉千加子 (2010). 結婚の才能 朝日新聞社出版局

青野篤子

- 渋谷晴子 (2008). 第三世代フェミニストとリブとの距離とは何か 女性学年報, 29, 45-69.
- 内田伸子・田中京子・荻原万紀子・菊池美千世・増田かやの・富山尚子 (2006). ジェンダーフリー教育の実践研究とその普及—ジェンダーをめぐる高校生とその両親の意識—お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 89-96.
- 和田 実 (1994). 恋愛に対する態度尺度の作成 実験社会心理学研究, 34, 153-163.

付記：本研究のデータ収集にあたり福山大学4年高山陽子さんの協力を得た。平成25年度科学研究費助成事業(学術助成基金助成金)(基盤研究(c))(課題番号 25380863)の助成を受けた。

娘からみた母親と世間の恋愛観

Mother's and public people's view on love from the eye of daughter

Atsuko Aono

University students are in a period in which they think about their future work and marriage. Especially, reconciling work and family is a major problem for female students, whose attitude may be influenced by their mother as a role model and public people as agents of social stereotypes. The present study focused on romantic love and examined the similarities or differences in views on love among one's own, same gender's parent and the public people. 124 female students and 335 male students were asked to respond to the Wada's romantic love scale (1994) in three ways. The factor analysis showed that the scale consisted of two dimensions, i.e., supremacy of romantic love and romantic love happiness. In the first dimension, both females and males estimated that the public view is higher than one's own and same gender's parent. In the second dimension, although males estimated that one's own was higher than others, females estimated that one's own and the public was similar. Even though the daughter's generation has a more positive attitude towards romantic love than the mother's generation, how it is related to the egalitarian attitude should be explored hereafter.

【Key words: view on love, daughter, mother】